

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

### 【タイトル】

塵芥ヒーロー列伝?

### 【作者名】

黒津

### 【あらすじ】

その時々で思いついたのを書いていきます  
自己満足です、数話書いたら終わります、丸投げジャーマンです  
なんだったら勝手に使っても結構です

「くつくつく、俺が最初の刺客……ウボアーッ！」とかでも「自由に

# 第一話・「ネクト＝プリキュア

そこには誰もいなかつた。

アスファルトの道路にコンクリートの建物。そこには生きる人々がいへば普通の街並みだ。

だが、そこには誰もいなかつた。

いや、2つたゞ生きていたのかいた  
一歩はアシシリ、ヨーの言葉が以前二そ

もう一方はヒーロー、という言葉が似合う格好の人物。ただし、小動物に武器を向けている姿をヒーローと呼ぶのがいい。

「バカ野郎」の「バカ野郎」

小動物は血塗れの姿で『ヒーロー』に呼びかける。  
しかし、ヒーローはヒールの「」とく……

「まだだ、まだ足りない……」

返り血を浴びたヒーローは一人の男に姿を変えて闇夜に消える。

# 「ネクト=プリキュア

朝、新しい民家の自室で少女は座っていた。目の前にあるのは、少女の持ち物としては

「父さん、今日も頑張つてくれるね！」

パンひとつ手を合わせた少女はカバンを取り、一階の食堂へ向かう。

「おはよー、母さん、パパ！」

食堂には優しそうな青年とエプロン姿の女性がいた。

青年のほうは食事を終えたのか既にコーヒー・カップを傾けている。

「おはよー、ミライ

「今日も元気だね、ミライは」

明日原未来（アスハラミライ）、今日も彼女の一日がはじまる。

「行つてきまーす!!」  
「行つてらっしゃい」

今日も元気に家を出る娘に微笑んで見送る両親。  
しかし、父親の心の中は複雑だった。

「僕はまだ『パパ』なのか……」  
「サクヤさん……」

明日原家は一度、父親を亡くしている。  
今の明日原の大黒柱は娘とは何の繋がりもないのだ。

「あの子は位牌を自分の部屋から出さないようだね。やつぱり僕は父  
親として認めてもらえないんだろうか……」

「大丈夫よ、サクヤさん。いつか、きっと……」

「キラウ！」……うん、そうだね

いつか、彼女の本当の父になるために。

レーフが、本家の家族になることを信じて

の一田もせじ能る。

C T C N

「シムグーハ、『J』ねーん!!」

閑静な住宅街に響く叫び声。

三木が友達と会流したのは家を出て大分経ての事だった。

「まったく、アンタまた人助けしてたの？」

いやあ、お婆ちゃんがおこし荷物を……

はいはい  
アシタの正義、ふりは分か  
てるね

一本道紡（イツポンミチヅムグ）、警備員を父に持つ彼女は自分の友人に父と近いものを感じていた。

彼女の人助には今にはじまつた事じやなし

ひどい時は過歎をしても詰がを取けるのだが

家が近い彼女と登校するよ、はなでからは、シはな、がきの  
合流する前に人を助けるから遅刻寸前なのが現状である。

「まったく……いい加減にしてほしいわね？」

「ごめん、でも父さんのクセだから」と

「いいよ、されど父さんのことは誇りに思つてゐるが」

明日原一作（アスハライツサク）、ミライの父親。

NSAS（ニホンスーツアクタースタジオ）の元エースだった男。

『ハイパー部隊』シリーズの主役枠、ファーストを担当していた。

いがい 徒の正義感に付託で済むかにて がく 実生済にモア が

「よし、今日も頑張るぞー！！」

「そうね、頑張つて居眠りだけはやめなさい！」

明日原未来の正義は真面目な学生態度に繋がつてなかつた。

C H I C K E N

「……つたく、頭が痛い」

公園のベンチで男は寝転がつて呟いた。

止手にある貯布の中鳥は軽い……たが、それ以上に頭の痛い」とか

しかし、男はグッと手を握り締める。

「誰かがやられたんじゃないよな」

C T N

「あ、今さあやったー！」

「さっきまで寝てただけあつて清々しい声ね？」

ノルマの翻訳によるシーザーの翻訳ノルマ

何か凄い真剣に頼まれたのだ、先生から、ミライのことを。

だが正直に言つて勘弁して欲しい。

興味のない事は極端にやる氣のない彼女。

そんな彼女は興味のあることに全力を尽くすのだ。

それこそ、尽くしきれて常にバッテリー不足だから授業中に眠るほどに……

「……つていなし」

「ツムグーっ、こいつちこいつちーっ！」

「アンタ、どこ行つて……なにこれ？」

ミライの足元にいたのはファンシー、ところが言葉が似合ひそうな小動物だった。

ミライに向いて鳴いているのを見ゆ限り、ぬごぐるみではなもそつだ。

「くきゅうー、くきゅうー」

「はつ、これはもしや!?」

「知つてゐる、ミライ？」

「セイントファイターのセイントパートナー!!」

Q：セイントファイターとは？

A：アクションヒロインアニメ

「……んなわけないでしょ」

「でもでもでもー!!」

たしかに、こんなファンシーな小動物に心当たりはない。  
だからって、そんなモンが現実にいるわけがない。

=====

「おい、ガキンちよ……」

結局、ミライが小動物の面倒を見ることになった。  
そしてツムグと別れた時に、男は現れた。  
黒い髪、黒い瞳、ダークブルーのジャケット。  
とにかく暗いとしか言いようがない男だ。  
ぶつっちゃけ、不審人物と言つても正解っぽい男だ。

「え、あ……なん、ですか？」

「お前、さつき動物を拾つただろ？」

それを知つているなんてストーカー？

ミライの不安など知らずに男は話を進める。

「その動物、俺に渡してもらおうか？」

「な、この子を……どうするつもり？」

「詳しく述べ言えない。だが、どうしても渡してもらいたい」

ジリジリと詰め寄る暗い男。

「きやーっ、痴漢よーっ、変態よーっ！」

「……つたく、面倒な」

少女の叫び声で男は姿を消す。

叫んだのは別れたらばかりのツムグだった。

「アンタ、いついう時には助けを呼びなさいよー。」

「ツムグ、どうして？」

「ペット大百科、古いのだけど持つてきたのよ」

「あ、ありがとう」

足元にいる動物を見る一人。

あの男はなぜ、この子を狙つたのだろう?

「ひょっとして凄い高級ペットとか?」

「うーん、どうなんだろ?」

====C=====T=====N=====

ツムグの声を聞いてやつて来た警官。

その話を聞いて大騒ぎした家族と話を終え、ミライがベッドに入つたのは深夜だった。

「今日は大変だつたなー」

「くきゅ?」

「キミつて……何なん……」

明日原未来(アスハラミライ)、いつもと違つた彼女の一日はこうして幕を閉じた。

## 第一話・「ネクト＝プロキア、その2

田の前に広がっていたのは赤い森だった。

元々の色でも、紅葉でもない、赤く揺らめく……

ヒーローは森を前に足を止めていた。

ただし、守るべきものを守れなかつた者をヒーローと呼ぶのなら。  
この世界に投げ出された自分を救つてくれたのは小さな命だつた。  
生きる氣力のなかつた自分に田舎を『与へてくれたのは優しい世界  
だつた。

故郷と同族を捨てても守りたいと願つたのは愛しき未来だつた。

だが、それが燃えている。

だが、それが守れないでいる。

だが、それが、それが、それが……

「……なんか悲しい夢を見たような」

いつものような健やかな寝起きとは違つ、そんな朝だつた。  
もしかしたら昨日のせいかもしれない。

勉強机の上に乗つたカゴの中では不思議動物が眠つてゐる。

「名前、考えてあげなきゃ」

そんなことを思いながらも彼女は制服に着替え、位牌の前に座る。

「父さん、今日も頑張つてくれるね」

「そりや、大変だつたわね？」

「うん、『ミライ』がはじめてワガママを言つてくれたー！今夜はお赤飯だー！」つて

「……あ、うん、本当に大変だ」

今日は珍しく人助けもしないでツムグと合流したミライ。義理の父は優しい男なのだが、たまに暴走するのだ。自分を大切に思つてゐる、といふのは分かるのだが。

「よし、今日も頑張るぞー！」

「そうね、その意氣で居眠りだけはやめなさい」

その意氣で起きていられたのは授業開始後10分だけであった。

「ちつ、面倒なことになつたな」

暗い男は喫煙スペースで苦い顔をしていた。

彼は喫煙者ではない。

だが、こうでもしなければ職務質問にかかりそうで困るのだ。

「……つたぐ、あのガキのせいで」

思い出すのは昨日の少女一人。

ようやく目的のものを見つけたのはいいが、社会的に面倒な連中に  
守られているのだ。

昨日から青い制服のアンチクシヨウが増えている気がする。  
男はカードと携帯電話を取り出して決心した。

「今日の夕方……使つか」

=====C=====T=====N=====H=====

「あー、今日も終わったー！」

「あのさ、そろそろ怒るよ、本氣で」

でも本当に怒れるわけではない。

態度のきつい自分と友人をやつていける人間など滅多にいないの  
だ。

そして、純粹で正義感の強い彼女について行けるのも自分しかいな  
い。

口に出さなくとも互いに親友と言える仲の一人。

「今日は寄り道は無理みたいね？」

「うん、あの子が心配だから。ツムグも見に来ない？」

「ええ、そうね……あら？」

異変に気付いたのはツムグのほうが先だった。

閑静な住宅街抜けて商店街を歩き、再び住宅街に入る。

そろそろ商店街のはずなのに入りの気配がしないのだ。

いや……一つだけ、気配がした。

そう、それは昨日見たばかりの男だった。

====C=====T=====

「昨日、ぶりだな、ガキんちよ？」

「ガキじゃないわ、明日原末来つて名前があるのー。」

「ちよつと、//ライ!!」

躊躇いもなく本名を明かす友人に呆れるツムグ。  
しかし男の目的は彼女ではなかつた。

「昨日の動物、渡してもらえるかな？」

「どうするつもりか教えてくれなきゃ渡せないわよ」

「アレはお前の家にいるのか？」

「こっちの質問に答えなさいよー。」

「くわゅうー？」

「そり、くわゅうー……って!?」

そこにいたのは話題の中にいた小動物だった。

何も分かつていなかのような愛嬌のある表情をしていく。

「手間が省けたな」

「だめ、渡さない!!」

近寄る男の前に立ちふさがる//ライ。

傍から見れば悪の手先と正義のヒロインだ。

男はそれほど大柄ではない、もしかしたら義父より小さいかもれない。

しかし、その眼は少女でも分かる。  
明らかに敵意と殺意を持っている、そんな眼だ。

「ちよつと、//ライ!!」

ツムグの声でミライは動物の変化に気付く。  
その小柄な体が光を放っているのだ。

最初は淡かつたその光は、徐々に閃光と呼べる光になつていく。

「この光……本当に、セイントパートナー!?」

アニメの中だけだと思った英雄。  
その力が現実にあるのだとしたら?  
その力はいつだってヒロインのピンチに田観めるもの。

「そうだ、私は…………!!」

C T C N

「ぐぎゅああああああああああつ!!」

人気のない商店街に響く咆哮。

それは雄雄しくあり、獰猛な声でもあつた。  
そう、誰も予想など出来ないだろう。

「ちょ、なんなのこれ？」

あわが、あの子なの!?

「ながら源せといふがんたんネリノ！」

男の声に飛び出す小さな影

それは妖精と言つても過言ではない、愛らしい動物だつた。

「な、なに、もうわけ分からぬ……」

「よ、妖精!?

「コルル、クルル、一人を頼む!」

「ふぎゅあつ!」

「何なの、説明してよ!!」

「ゴーストタウン、豹変した動物、急に現れた三匹の妖精。  
そのうちの一匹はミライの顔にぶつかった。  
少女には理解できない出来事のオンパレードだ。」

「……つたく、お前たちの見つけた動物はファンシーマだ」

「ふあんしー、ま?」

「ファンシーマは妖精の国、コネクティア王国の住人だ」「あんなのが妖精なの!?」

ツムグの言いたいことも分かる。だが事実なのだ。  
妖精の国に比べ、人間の国は汚れている。

その汚れが王国で最も純真なファンシーマを凶暴化させたのだ。  
そして、それを追つて人間の国にやつってきた者がいるのも事実である。

「説明は終わりだ、コルル、クルル」

「はやく逃げるコルー！」

「にげないとあぶないでくるー！」

妖精たちに手を引かれて離れていくミライとツムグ。

羽賀根森人（ハガネモリヒト）は懐から携帯電話とカードを取り出した。  
その隣には妖精のネルルがいる。

「ごめん、救つてやれなくて……ガルディオ・バレルコネクト!!」

携帯電話のスリットにカードを走らせる。

するとネルルが携帯電話に吸い込まれ、携帯電話は装飾銃へと変化する。

銃から放たれる光はモリトの鎧へと形を変えた。

誰もいない街並みで小動物を撃つた、揺らめく炎の森で絶望した

それでも戦うことしか出来ない、戦士へと姿を変えていく。

『Card registration・For transformation limit 60』

さあ、準備は終わった。

戦いのはじまりだ。

高らかに宣言せよ、戦士の名は……

「守護の銃身、ディオ・バレル!!」

第三話・コネクト＝プリキュア、その3

この子達は自分達に笑いかけてくれた。

よそ者であるはずの自分達を慰めてくれた。

だからこそ願うたこの小さな命は幸あれ  
から、その頃には十の娘の夫。

彼らの願いをよそに、奴らはこの子達の力を利用することを考えて

いた。

だから、同じ人間でありながら彼らと奴らは戦つた。

彼らは妖精の国に伝わる力を使い奴らは妖精の中に眠る力を利用し

C T N

「ぐわああああああああああああああ!!」

ゴーストタウンになつた商店街でそれは叫んだ。  
5メートルは確實に超えるだろう、その巨体。

見るものによつては『リス』とも『ウサギ』とも表現できるだらう。こんな巨大で凶悪なリスやウサギがいるかどうかは別として、そして巨体、ファンシーマの前には黒い戦士、ディオバールがいた。

「なんだか怖いでねるー」

「我慢してくれ、いつも通りに戦うしかないんだ！」

一つも通りこ戦り、一つも通りこ始末する。

ディオバールには、それしか選択肢がなかつた。

しかし、今回ばかりは彼にも疑問がある。

(今さつき凶暴化したのになんシーガ級じゃないか?)

凶暴化したファンシーマは時間が経てばファンシーガへ更に凶暴化する。

ディオバレルは腰のカードケースからカードを取り出す。 ネルルと携帯電話が変化した銃、ネルバレラーで読み取るためだ。

「バレルコネクト・トゥーハンド！」

カードの力で分裂するネルバレー。  
今、ゴリスト商店街は戦場となる。

II  
C  
II  
N  
II  
II  
II  
II  
II  
II

「さあひ、さあひ、ヒーヒーティー、来れば……」「わよひ、わよひ、ヒーヒーティー、叶わざ

息を切らせて走る少女一人、これだけ真剣に走つたのは体育祭のリレーくらいだろうか？

「だらしねこじへ……」**アキラ**「アキラ一。」

「アーニー、それには、強引れといひての意味、」

びよーん、と伸びるクルルの頬。

もうツムグも自分で何をやっているのか分からぬ状態だ。

「……で結局アンタたちはなんなのよ?」

ようやく落ち着きを取り戻したツムグは妖精たちに問いかける。騒ぎの中心地にいたのにも関わらず、なにも知らないのだ。

「僕たちも全部を知っているわけじゃないコル」「でもわかることははなしてもいいぐるよ?」

=====

妖精の国、コネクティア王国。

様々な世界と繋がり、様々な妖精が幸せに暮らす世界。

しかし、その中でもっとも純粋な妖精のファンシーマが行方不明になつた。

伝説の守護者、ガルディオと伝説の妖精であるコルル、ネルル、クルルは行方不明になつた妖精が人間の国にいることを突き止め、それを追つてきたのだ。

「へー、あのネクラっぽいのが伝説ね……」

「ツムグ、ちょっと言い方悪くない?」

「だって伝説でしょ、心配して損しちゃったじゃない?」

たしかに、あの巨大な敵を相手にするとなると……

しかし、戦うのは伝説の守護者なのだ。

しばらくすれば戦いも終わる。

そんなはずだった。

＝＝＝

＝＝＝

「もう30分は過ぎてるわよね？」

「時計が動いてないから分からぬいけど、それくらいかな？」

商店街のあつた場所では未だに戦いの音が聞こえる。

「」の「ゴーストタウン」が伝説の守護者の仕業なり、解放されるのはまだ先のようだ。

そんな中、妖精はそわそわとしている。

「信じられないくらい強いコル」

「……ちょっと、どうしたこと？」

「モリヒトはどんなに時間がかかっても30分で決着をつけたコル

！」

「これこじょ「まきんぐるーー！」

自分に手を引かれていたお氣楽生物のクセに？

「」の表情はそれを思わせない表情だった。

「これ以上戦うとどうなるの？」

「これ以上戦うと変身が解けるコル」

「へんしんがとけると、」のせかいももとのせかいにもどるべるーー！」

「元の世界……って、それじゃ！」

「倒せなかつたファンシーマも……元の世界に」

爆発音は止まらないままだ。

いや、むしろ逃げていた時より激しく感じる。

「いつも、そんなギリギリで戦っているの？」

「今度のファンシーマがすごく強いコル

「ファンシーマのつよさはやどぬしのじいのつよやくるー」

「宿主って……私!?」

ファンシーマは純真な妖精の国の住人である。

しかし人間の国の汚れはファンシーマを凶暴化させる。

そして、その力の強弱は面倒を見た人間、宿主に左右される。

「バカ言わないで！ミライは汚れてなんかないわ！」

「ぐりゅりゅりゅー！」

「ツムグ、落ち着いて！」

「悪い考え方だけが汚れじゃないコル」

「悪い考え方だけじゃない……そうだ、力が欲しかった」

「……ミライ？」

それは少し前だったか、大分前だったかは覚えていない。  
しかし、父が死んだ後の冬だったのは分かる。

母が泣いていたのだ。

なにが切っ掛けだったかは分からない。  
冬の景色がそうさせたのかもしない。  
ただ、位牌の前で母が泣いていたのだ。

それからだ、位牌を自分の荷物としたのは。  
それからだ、自分の人助けが今まで以上に多くなったのは。

「あのが、私の心……つ！」

「ミライ、待ちなさい！」

「クルル、ツムグを頼むコル！」

「ぐりゅー……」

=====

====C=====T=====

「バレル」「ネクト・マグナム」「オーバードロー』

読み込んだカードが炎をあげて燃え尽きる。

基本、カードは使い切るものではない。

しかし、カードに含まれる全ての力を解放することにより一回で燃え尽きるのだ。

そして、その代償に得られるのは強大な力。

青年の腕に収まる程度の装飾銃は戦車砲に匹敵する凶器となる。しかし、それでもファンシーマは止まらなかつた。

「単純な力押しじゃ倒せないな、コイツは  
「もう、残り時間が15分しかないねる！」

「残ってるカードは？」

「コール、ループ、ライドの3枚だけねる……」

通信、空間制御、戦闘補助……攻撃的なカードは使い切った。

しかし、それだけあれば充分だ。

ディオバレルは3枚のカードを取り出す。

「ネルル、ここでさよならだ」

「……イヤだねる!!」

「変身を含めた4枚のオーバードローによる自爆攻撃しか方法はな

い」

「ほかの方法を探すでねる!!」

「ないよ、今の俺たちには」

いや、一つだけ方法がある。

敵は物理的な攻撃で倒すことは出来ない。  
なら、物理的でない攻撃を使えばいい。

しかし、それは『ガルディオ』の分野ではなかつた。  
伝説の戦士は3人いる。

### 浄化の乙女、守護の戦士、踏破の勇士

今、この状況を打ち破るのは浄化の力しかない。  
しかし、ディオバ렐にその力はないのだ。

「行け、新しい3人を見つけるんだ！」  
「イヤねる、イヤねる、イヤだねるー!!」

互いに大切だから意見の食い違う一人と一匹。  
しかし、その敵は無情にも近付いていった。

「ぐぎゅあああああああああっ!!」  
「……つたく、ここで終わりか」

「待ちなさあああああい!!」  
「……は？」

第四話・コネクト＝プリキュア、その4

止めないと、止めないと、止めないと.....

爆発に揺れる商店街の中心地、そこで彼らは戦つて いる。

「やめるコル、行つても無駄だコル！」

「無駄でもやらなきゃいけないの！あれが私の心なら、父さんの願いは誰かの幸せを奪うのならー」

「その父親のことには知らないでいるのも、その話には三うへも入ってるじゃないコルか？」

それは考えた。

でも、度を止めな」叱咤出來なかつた。

そこで止まらずに進み続けるのが自分の悪い所だと知っている  
それでも、自分の心に決着をつければと信じて。

「ミライ、その覚悟は本物でコルか?」

伝説の戦士は3人いる。

浄化の乙女、守護の戦士、踏破の勇士

モリヒトはネルノと契約することでカリテ・オの力を手に入れた  
妖精の国を守るために、守護の戦士の道を選んだのだ。  
誰もがなれるわけではない、誰がなれるかも分からぬ、伝説の戦  
士とはそういうものらしい。

「私が、浄化の乙女に？」

「ミライの顔にぶつかった時に気がついたコル、ミライの力について」

「その力があれば私も戦えるの？」

「……その覚悟は本当に本物コル？」

「こんな事態なのだ、正義感が先走った考え方かもしれない。  
コルルはそんな選択のつらさを知っている。

ディオバ렐、モリヒトもそんな人間だからだ。

戦える人間が自分しかいなかつたから、だから守護の戦士となつた。

モリヒトは表向きに愚痴を言い、悪態をつきながらも妖精の国を守るために戦ってきた。

しかし、その言葉が強がりであることは妖精の誰もが知っていた。

「だから、その覚悟は本当に本物コル？」  
「……本物だよ、絶対の、絶対に」

「だから、待ちなあああああー!!」  
「……は?」

ディオバ렐の気の抜けた声が聞こえる。

そうだ、自分たちがこんな所で高らかに叫べば不思議に思うだろう。

そして、自分の心を映したファンシーマの動きも止まっている。

「私の心は……私が止めてみせる!」

「ミライ、これの画面にカードをあてるコル」

「コルルの手にはスマートフォンと一枚のカードがあつた。

やつ、ティオバールに変身するときと同じよつた。

「コルル、お前……よせ、やめなー。」

「やめないコル、//ライは本氣だコル！」

//ライは強い瞳でファンシーマを見つめる。  
あの子は自分の過剰な良い心で歪んでしまったのだ。  
なら、その歪みを戻すのも自分の役目だ。

「//ライ、変身だコル！」

「うん、行くよ……プリキュア・ネクストコネクト!!」

スマートフォンの画面にカードを押し当てる。  
すると読み込みは完了しコルルとスマホは装飾のついたコンパクトへと変化する。

コンパクトから溢れる光は//ライを包み、リボンの多いドレスに変わる。

『Card preparation・For transformation limit 20』

さあ、準備は終わった。

戦いのはじまりだ。

高らかに宣言せよ、乙女の名は……

「聖なる未来、キュア・ネクスト!!」

=====C=====T=====N=====

「あのガキが、プリキュア?」

ディオバールは荒い息で彼女を見つめる。

もう、変身と無人世界を維持するので精一杯だ。

確かに浄化の乙女の力なら、あのファンシーマを倒せるかもしれない。

だが、やれるのか？

今、この瞬間に変身したばかりの子供が……

「ぐぎゅああああああああああああっ!!」

「よーし、来なぞ……つて速つ!?」

あの巨体から想像出来ないスピードで迫るファンシーマ。キュアネクストは咄嗟に一枚のカードを取り出す。

「ネクストコネクト・ハイテンション!」

次の瞬間、ファンシーマ以上のスピードでキュアネクストが動き出す。

そして連續バク転でファンシーマの突撃を回避してしまった。

「わははははは、NSAS式連續バク転!!

「凄い……」

「わははははは、ハぶしつ!!」

「凄い……バカだ」

バク転しそぎて壁にぶつかった。

ハイテンションは肉体を上向きに強化する代わりに、精神的にも上向きに強化してしまったカードなのだ。

「ぐぎゅああああああああああああっ!!」

「はつ、まつ、なんのつ!?」

しかし失敗したのは一度だけだ。

その後は的確に攻撃を避け、隙を見ては一発ずつ攻撃をいれてい  
る。

しかし、その程度でファンシーマは倒れない。  
そんな攻撃で倒せるのならディオバレルの攻撃で既に倒せている  
はずだ。

「くっ、全然倒せないよ！ どうすればいいの！？」

「フィニッシュのカードだ、それしかない！」

ディオバレルの助言が飛ぶ。

しかし、フィニッシュのカードがどれか分からぬ。  
もたついている間にファンシーマの攻撃が命中した。

「へぶつ！？」

「あのガキ……考えるだけでいい、必殺技のカードが出てくんなよ！」  
願え！！

「必殺……必殺技、必殺技、必殺技！！」

ケースの中に並んだカードから一枚だけが顔を見せる。  
ふちが金色のカードは確かに特別そうに見える。

「後10分しか変身できないコルよ！」

「うえつ!? あわ、ど、どうすればいいの!?」

「必殺技に決まりはない、感じたとおりにやれ！」

時間もない、敵から受けた攻撃も痛い、どうすればいいのかも分か  
らない。

キュアネクストは先輩の助言を信じ、カードを読み込ませる。

「ネクスト」「ネクト・ファイニッショウ！」

読み込ませた瞬間、衣装のリボンが大きくなる。

もはやリボンではなく8枚の翼だ。

キュアネクストはリボンの羽ばたきで大空を翔る。

「プリキュア・ネクストダイバー!!」

C T C N

た。キュアネクストの必殺技、それはリボンを盾にした体当たりだつ

「ネクスト・エンド!!」

「ぐわあああああああああああつ！」

アーティストによるアート

大爆発の末に、凶暴化したファンシーマは元の上にあけた手を締めはす。一方若タバコ

ていた。

「ஈடுகள் ?」

「よかつた、元に戻つたんだ!!!」

卷之三

リターン、それは妖精の国にあつたものを妖精の国へ送還する力だ。

このまま人間の国にいればファンシーマは再び凶暴化するだろう。

「ハサウエイー？」

「や、おうちに帰る？ ネクストコネクト・リターンー！」

C T C N

「あの……私、あなたのことを誤解してた」

一ネルル、  
クルル、  
行くぞ」

無人世界をといてから一人はツムグ、クルルと合流した。  
ミライはモリヒトに誤らうとするが立ち去らうとする。

卷之三

「その、プリキュアの事について……」

「この事は他言無用だ。分かるな？」

その眼は出会ったときと同じ、鋭い眼だ。

「待つコト、ミライはようしひへ見つけた

「コルル、お前はそいつらに色々と教えておけ」

モリヒトにてはようやく出来たはじめての仲間のはず。  
しかし、彼の態度は冷たいものだつた。

「俺は……あんなガキがプリキュアとは認めない！」

# 「ネクトプリキュア設定1

人物、用語設定

C T N

二ノケテノノ五國

異世界に存在する妖精の国で、様々な世界と繋かりを持つたため命名された。

基本的には住人は好糞で気質はおおらかな好糞が多いが一部で神固だつたり利己的な種族もいる。

数年前に人間の国の住人が迷い込み保護するが、半数は妖精たちの力を悪用しようと企む。

残った半数は妖精の力を研究し、伝説の戦士を復元することで事件を終結させる。

妖精利用派の人間は妖精の国に関する記憶を消されて人間の国へ送還。

だ人間の送還にあたる。

伝説の戦士

妖精共存派の研究によりルルール族の妖精と波長の合う存在が変  
净化の乙女 守護の戦士 踏破の勇士の3人からなる王国の戦士

奥出来ナリとか分かってしナ

妖精の国に溢れる力を妖精以上に使うことが可能で、研究の末にカードと端末を利用した簡単なものに落ち着いた。

＝＝＝

### 妖精の力とコネクトカード

妖精の国の方を利用して様々な現象を引き起こすアイテム。

妖精たちも使うことが出来るが『雨を降らす』行動が台風になつたり、逆に日照りになつたりで安定しない。

結果として妖精による力の行使は禁止となり、伝説の戦士の戦う手段となつてゐる。

コネクトカードは妖精の力を無駄なく確実に使用するために開発された。

ルルール族が伝説の戦士の力から具現化した情報を扱う道具を使うことで妖精の力を使うことが出来る。

人によって情報を扱う道具はメモ帳から電卓、携帯電話やＰＣと多岐に渡るらしいが、例がないため実際は不明。

カードは消耗品ではないが、オーバードローという利用法で消滅してしまう。

カードの生産には時間がかかるため、オーバードローは諸刃の剣でもある。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

### 羽賀根森人（ハガネ・モリヒト）

守護の戦士ガルディオに選ばれた人間。

数年前に妖精の国に迷い込んだ人間で無氣力で皮肉的かつネクラな青年。

妖精たちとの触れ合いで優しい心に目覚め、妖精共存派の戦士として戦う道を選ぶ。

しかし浄化の力を使えないために凶暴化した妖精を始末する役目を負うこととなる。

名前の由来は鋼、守人

ネルル

モリヒトの妖精でガルディオの力を秘めている。

個別の性格に差があるルルール族の少女でやきもち焼きの背伸びしたがり。

==== C === T === N ===  
==== C === T === N ===

ディオバ렐

守護の戦士ガルディオに変身したモリヒト。

変身した当時は他の戦士がいなかつたために単独でも戦えるように多数のカードを持つ。

ネルルとガラケーが融合した装飾銃ネルバレラーが主な武器。  
情報端末がガラケーなのはモリヒトにとって情報端末がガラケーだからである。

保有カード

変身（ディオトランス）

ディオバ렐への変身。

掛け声は「ガルディオ・バ렐コネクト」

カード使用時は「バ렐コネクト・」

呼出（コール）

妖精の国や情報端末との通話呼び出し。

結界（フィールド）

使用者が指定したものだけを残した無人世界の形成。  
ただし、いくつかの例外は無人世界に進入可能。

その空間で物体が破壊されても現実世界の物体に影響しない。  
範囲は使用者を中心とした球状で大きさは自由だが、大きいほど破

壊されやすい。

よつて、ファンシーマを取り込む際は近付いて使用するのが基本。

### 輪列（ループ）

特定の空間を繋げた閉鎖空間の形成。

結界の下位能力だが結界の中で重ねがけすることが可能。

### 騎乗（ライド）

高速一輪車マシンバレラーの使用。

### 二刀流（トゥーハンド）

武器の二刀流、二丁拳銃化。  
オーバードローにより消失。

### 強化弾（マグナム）

飛び道具の破壊力を強化する。  
オーバードローにより消失。

### 殲滅機（ランチャヤー）

広範囲攻撃の発動装置。

オーバードローにより消失。

### 包囲網（フルレンジ）

複数の攻撃端末による同時攻撃。

オーバードローにより消失。

### 速攻撃（ラピッド）

攻撃速度の強化。

オーバードローにより消失。

### 爆裂化（エクスプロード）

攻撃に爆発を加える追加ダメージ。  
オーバードローにより消失。

**最終攻撃（フィニッシュ）**  
ディオバレルの最強兵器、いわゆる必殺技。  
オーバードローにより消失。

## 第五話・「ネクト＝プリキュア、その5

「……つたく、頭が痛い」

別に本当に頭痛がするわけじゃない。  
昔からの精神的に暗いときの口癖なのだ。  
モリヒトはカードと携帯電話を取り出す。

「バレル」ネクト・「ール『メガネ』」

『ちよつと、人の事をメガネで呼び出すのはやめてくれないかな?』

「ール、それはリターン同様に妖精の国に直接繋がる数少ないカードの一つだ。

使用宣言の後に名前を呼び、顔を思い出せばどんな状態でも繋がる。

呼び出したのは妖精共存派の一人であり、現在も妖精の国で研究を続ける学者、通称メガネだ。

『それよりプリキュアのカードが人間界に送られていたけど?』

「ファンシーマが一匹送還されたはずだ、分かるだろ?」

『そつか、ようやく仲間の登場だね?』

メガネは安心したような声を出す。

彼もモリヒトが妖精を愛しているのを知っている。

プリキュアの誕生、それは始末することでしか救えなかつた妖精を助けられる事もある。

しかし、今回の話はその報告だけではない。

「王国会議はどうなった?」

『プリキュアの誕生と共にガルディオの契約解除が出てる』

「ガメット族とジャステイン族か？」

ガメット族は妖精の中でも珍しい金銭や利益に執着する種族であり、ジャステイン族はガルディオの復活以前から王国を守る守護妖精の種族だ。

どちらも王国会議で反対意見を出す代表格だ。

『ガルディオは妖精共存派やルルール族の独占みたいなものだからね、いい気がしないんだろうよ？』

卷之三

『キニイが凶暴化した同族を始末した事かい？それだつたら受け入れてゐるよひだよ

- - - - -

「少し役目を押し付けたて廻してゐる上

『ああ、アスハラとか言つたつけ？』

「……なん、だと？」

結婚が決まつたときに一番、気になつたこと。

それは相手に年頃の連れ子がいたことだ。

壊に繋がらないか？そんなことを気にしていた。

一緒に暮らしてみてそれが杞憂だと分かつた。

女だつた。

少しづつ家族になつていけばいい、自分なりのペースでいいんだ。

「……と、うわがでファンシーマを保護する」「ル」と

本父のイッサクさん、あれはどうすればいいんですか？  
義父のサクヤは困惑っていた。

SF（スコシフシギ）な義理の娘が、まさかファンタジーの住人を連れてくるとは思わなかつた。

「それで、私たちはどうすればいいの？」

キョウコさん、置いてかないで。

……つーか順応早すぎるよ、みんな。

サクヤがツツミをいれる暇もなく、話は前へ前へと進んでいく。

「妖精の国は人間の国と交流がないから、協力者も拠点もない」「ああ、ようするに家に住みたい、という事ね？」

ああ、なんか家長の意見をすつ飛ばして話が進んでいる。  
別に父親としての権力をかざすつもりはないのだが、ここまで無視されると気分が悪い。

「まかせなさい、事件が解決するまで我が家だと思つてくつろいでくれ」

「多分、止めても止まらないでしょ」「ライをよろしく頼むわね」「ありがとう、母さん、パパ！」

あれ、勢いに任せて重大な決断をしてしまつた？

新米パパがそんな事に気付くのは就寝前のホットミルクを飲んでいた時だった。

＝＝

「……つたく、現代人つてのは警戒心がないのか？」

モリヒトは林の中で愚痴をこぼした。

彼も現代人といえばそうなのだが、数年近くを妖精の国で過ごして  
いたために感覚が分からぬのだ。

『まさか携帯電話がタッチパネルになつてたとは、驚きだねー？』

『うつさいよ……それより俺のカードのストックは何枚ある？』

『全然ないよ、キミがまとめて持つて行つただけで最後だつてば』

『ガルディオでも使える净化のカードは？』

『そつちも無理、技術系が違すぎるで流用なんか出来ないよ』

最悪だ、このままでは子供に手助けしてもらつ羽目になる。

『まつたく、気難しいねキミは？』

『……いいからカードの増産と研究を急げ』

「コードを解除して携帯電話をしまつ。

状況は悪くなる一方でしかない。

王国と日本の交流がなかつた為に資金援助や住居提供も口クになり状態だ。

国庫の宝石をいくらか持ち出してはいるが、妖精にとって価値のある宝石など高が知れている。

『たくさんあつて凄い』『キラキラして凄い』『何となく凄い』のどれかだ。

別にそれを怒るつもりはないのだ。

それが妖精の好みとしか言いようがないのだから。

「ネルル、クルル、行つていいぞ」

「行へつて、どうおる?」

「恐れ入る事無事か？」

正直に言えば、あの少女に頼りたくない。

だが、このままの生活では妖精が参つてしまふかも知れない。  
まさに八方ふさがりだ。

そんなことを考えながら、今夜も林の中で眠りにつく伝説の戦士だった。

「私つて嫌われてるのかなー」「急にどうしたコル？」

「シゲの母が死んでいた。

気になつてゐるのは先輩のディオバルについてだ。

「そもそも、どうせ人なんだから」

「羽賀根森人、数年前に妖精の国に迷い込んだ人コル」

数年前、人間たちが妖精の国に迷い入る。

未知の世界に迷い込んだ人間は二つの派閥に分かれた。

奴精利用派と奴精共存派である

使って互いに争つた。

「その時に復活したガルディオの力を手に入れたのが……」

「ね、モリヒト」「ルよ。モリヒトは戦いが終わつた後も妖精の国に  
留まつて、みんなを守り続けた」「ル

そう、長い間を戦い続けてきた。

様々な国に繋がるコネクティア王国だからこそ、様々な国の悪しき存在が現れるのだ。

「でも、モリヒは優しいコルよ？」

どこがどうつか？

『あのガキ』とダウナーな目で睨みそうだ。  
優しさって何だっけ、と考えたくなる。  
さらに悩みながらもミライは目を閉じた。

でも、///ライと出合えてよかつたコルト

「ミラノのローバーはなぜ凶暴

「あ……」

そうだ、プリキュアの力がなければ妖精を救うことはできない。  
なら、自分は……

C T C N

空気が湿り気を帯びる早朝。

まだ眠りの時間ともいえ、人によつては出勤する時間とも言える、  
そんな時間帯。

公園の中を走る影があつた。

(今度こそ大会に出るんだ!!)

体育会系らしく短く髪をそろえたスポーツ少年だ。

中学指定のトレーニングウェアの色は今年の2年生、来年の3年生にあたる色だ。

次の予選大会がラストチャンスなのだろう、走る姿は本番と同じ気力に溢れていた。

彼の同級生が見たら、こう答えるかもしれない。  
熱意を超えて、執念だと。

(あいつにも約束したんだ…)

思い出すのは自分の新しい家族。

突然、我が家に迷い込んだ小動物である。  
不思議と悩みを話しだせば、話しただけ気分が楽になるよつな気がする。

深夜の告白は早朝練習と並ぶ口課となっていた。

(もっと速く、もっと速く……!!)

その願いが大きなことになるとは知らずに。

＝＝＝

「いだつてえええええんつ!!」

朝の公園を震わせる巨大な声。

公園の林で野宿をしていたモリヒトにはすぐになにが起きたか分かつた。

「……つたく、こんな朝っぱらか」

「近いねるから、早めに終わらせて眠るねるよ

クルルはまだ眠っている。

大物なのか、先行き不安なのか……

林の中から出てファンシーマを探そうとする一人と一匹。すると、巨大な何かが彼らの前を通り過ぎた。

「いだつてええええんっ!!」

「……つて速えつ!?」

ビードレードと地面を揺らして走り去るファンシーマ。

凶暴化するとファンシージャないのは知っているが、あれはムキムキマッショなランニングマンだった。

「ボーッとしてる場合じゃないか、バレル」「ネクト・ライド!」

モリヒトは林の奥に隠したバイク、マシンバレラーガンを召喚する。ファンシーマと戦う際は結界で無人世界をつくる必要がある。しかし、ファンシーマを巻き込むには距離が大きすぎるのだ。仮に結界に巻き込んだとしても、ちょっととした衝撃で結界が破壊されてしまう。

だからこそ、可能な限り距離を縮めなければならぬ。

「さて、安全運転ですっ飛ばすか」

## 第六話・「ネクト＝プリキュア、その6

「……つたく、予想以上のスピードだ」

ファンシーマを追いながらモリヒトは愚痴をこぼした。  
人間の国から迷い込んだバイクを妖精の国の技術で改造したのが  
マシンバレラード。

加速力や耐久性の強化はもちろん、人工妖精により自動操縦すら可  
能なのだ。

しかし、前を走るファンシーマとの距離は大して縮まつていない。

「いだつてええええんっ!!」

「仕方ない、何発か撃つておくか?」

『「コール・ネクスト』

「……」

『「コール・ネクスト、コール・ネクスト、コール・ネクスト』

妖精産携帯電話に着メロはないのか、呼び出しメッセージが連続で  
再生される。

「……どうした?」

『「あの、私も手伝います!!』

「……どうやって?」

『「どこにいるか教えてください!』

「公園の横の大通りを追跡中、追い込める場所はないのか?」

モリヒトが出したヒントはあまりも脆弱。

もつとも、最近来たばかりの男に詳しいヒントを求められても困る  
のだが。

……でかい焼肉の看板があるぞ？

「焼肉……その道を右に曲がつてください！」

なにがあるのか?

ノルマニヤ正統方略

すべて言い切る前に通信は途切れる

やはり嫌われているのか 足手まといと思われたのか  
しかし、ここで待っているわけには行かない。

「行くコルか？」

卷之三

action limit 20

聖なる未来

変身したキュアネクストは早速カードを取り出す。

余裕毛ない。

森林公園まで車で10分、あのカードを使ったスピードなら車よりも速く着くはずだ。

「ネクストコネクト・ハイテクショウ」……よーい、ドン!!

「直線だ。ネルル、つかまれ！」

ジャケットの中にいるネルルに声をかけながらマシンを加速させていく。

市街地では追うのが精一杯だが、直線となれば話は別。

一瞬でファンシーマを追い抜かし、森林公园の柵を飛び越えるようにマシンに命じる。

マシンに命じた自分は何をやるか、そんものは決まっている。

「ガルディオ・バレルコネクト!!」

『Card registration・For transfer  
mation limit 60』

「守護の銃身、ディオ・バレル!!」

上空に跳躍するマシンの上で変身したディオバレルは銃を構える。一発、二発、ネルバレラーの銃弾はファンシーマの足場を崩していく。

当然、猛スピードで走っていたファンシーマも勢いで直線に転んでいく。

「バレル「ネクト・フィールド！」

公園の柵に触れるかどうかの瞬間に無人世界を作り上げる。

盛大に転んで樹木がなぎ倒されていくが、フィールドで作った世界ではなにが壊れても平気だ。

「いだつてええええんつ!!」

「さて、これから、どう、動……く?」

ファンシーマはモコヒトのことなど忘れ、公園の外に出ようとしている。

フィールドの外には出られないが、ミシリと嫌な音がする。

「す」こねる、体当たりでフィールドを壊すつもりねる…  
「感心している場合か、バレル「ネクト・ループ…」

フィールドの壁にぶつかったファンシーマは消えて、公園の中心から現れる。  
ループのカードでフィールドの外壁と公園の中心部を繋いだのだ。  
ファンシーマはそれに気付かないのか突撃してはループに消えて  
いる。

「……つたく、バカで助かつたよ」  
「モリヒトさああああん!!」  
「やれやれ、追ってきたのか」

制服姿のミライが走ってやつてくる。  
いつものクセで飛び出したはいいが、決め手となるカードも浄化の手段もないのだ。

「さつそくで悪いが、変身して浄化するぞ」  
「ヤだなあ、変身しますよ？」  
「ヤだなあ、プリキュアってのは学生服でもいいのか？」

そう言われてミライは自分の姿を確かめる。  
ワインレッドに紺のネクタイ、入学当初より少しだけ痛んだ感じは  
するが自分の制服だ。

「なんで!? 変身して10分もしないのに」  
「コルル、お前はなにをしてるんだ?」

=====

伝説の戦士は戦つ際に一つのものを消費する。

変身の力とカードの力だ。

変身の力は変身している間に一定の減り方をし、カードの力はカードを使つた時だけ減る。

だが、両方の力を同時に消費するカードがある。

「それが身体強化カードだが、コルル？」

「わ、忘れてましたコル……」

「あの、変身できなければ浄化は……」

ディオバレルは無言で睨む、出来るわけねーだろ、と。  
時間が経てば力は回復するが、そうなる前にフィールドの効果が終  
わってしまう。

ディオバレルはミライに電池式の充電器を渡した。

「型は違うが規格は共通だろ。バイクに乗つてる間に充電しとけ」「どうするんですか？」

「園内のロングブリッジを使う」

公園の湖にはロングブリッジがある。  
ループの設定を変更してファンシーマをそこに移動させるのだ。

「敵は一直線に走つてくる。俺がバイクで突撃して止めるから変身して浄化しろ」

「あの、回復しました……その、1分だけ」

「上等だ、変身したと同時に浄化しろ」

ロングブリッジの中間にミライを置いて岸に向かうディオバレル。  
ここから全力で走ればミライのいる場所の近くでファンシーマと激突するはず。

「チャンスは一度、行くぞ!!」

「はい、OKです!!」

「バレルコネクト・ループ『再設定』」

橋の向こう側が光り輝くと同時にファンシーマがあらわれる。そして、ファンシーマが走り出すと同時にディオバレルもバイクを走らせた。

「行けっ!!」

「プリキュア・ネクストコネクト……ネクストコネクト・フィニッシュュ!!」

激突する直前にミライは変身した。

ポーズをとる余裕もない、キュアネクストは即座にフィニッシュュのカードを読み込む。

「プリキュア・ネクストダイバー!!」

拮抗するディオバレルの横を抜けて突撃するキュアネクスト。しかし、敵の防御力は予想以上に高く、すぐに浄化できなかった。力をこめ続けるキュアネクストだが時間だけが過ぎていく。

「連れ、連れ、連れ……通りなさいよ!!」

『Battery residual quantity 0』

そんな中、戦いの舞台であるロングブリッジにも異変が起きていた。踏ん張っているバイクのタイヤがぐら付いているのだ。

「橋が!?」

「いだつてええええんっ!!」

足場が崩れる中、空中に投げ出されるプリキュアとガルディオ。キュアネクストの腕はファンシーマに伸びてはいるが、届いてはいなかつた。

「使え、プリキュア!!」

キュアネクストの手の中に小さな箱が投げられた。それは携帯電話のカバーを外せば見ることが出来る、バッテリーだつた。

しかし、ディオバレルがそんなものを投げてよこすわけがない。そう、投げた姿はディオバレルではなくモリヒトだつた。

『Battery exchange・Transformation  
n limit 20』

「プリキュア、一回田ネクストダイバー!!」

再びフィニッシュのカードで加速するキュアネクスト。しかし今度は出し惜しみはない、全バッテリーを消費するつもりでぶつかる。

「ネクスト・エンド!!

「いだつてええええんっ!!」

====C=====T=====N=====

「げほつ、べつ、べつ」

「大丈夫ですか、モリヒトさん!?」

変身を解除したモリヒトは何か湖の岸に泳ぎ着いた。

フィニッシュの際に出来た翼を使ったのか、キュアネクストは全く濡れていない。

「平氣だ……バレル「ネクト・ループ」

ループのカードでバイクを引き上げる。

カードの性質上、大体の場所が分かっていればこんな使い方も出来るのだ。

「今日は助かった。だが浄化のカードが出来次第、お前はプリキュアから……」

「モリヒトさんは優しいんですね？」

「…………」「私みたいな子供を戦わせたくないから、冷たい態度をとってるんですけどよね？」

「でも、私は大丈夫です。人助けが趣味ですから!!」

満面の笑みを浮かべて胸を張るミライ。

最初のときの勢いとは違う、彼女は自分自身で戦うことを決めていた。

「勝手にしろ…………」

濡れた服でバイクを押すモリヒト。

その選択が正しいのか、それは誰にも分からなかった。

## 「ネクトプリキュア設定2

人物、用語設定

C T N

川川川川族

妖精としては珍しく種族の性格差が激しいのが特徴。

実は伝説の戦士に関わった種族であり、妖精共存派の研究により、その力を復元することが出来た。しかし全部のルルールがそれを使えるわけではなく、幼い三兄妹弟が力を発現している。

が力を発現している。

C T N

明日原未来

人助けが趣味の、今時珍しいマツスク女子中学生。どんなに悪い第一印象でも最終的には良い仲に変わっている、奇妙な気質の持ち主でもある。

なためフリーの身である。

母と再婚した義理の父と三人で暮らしているか『父さん』『母さん』に対し『パパ』と呼んでしまつ。

名前の由来は明日と未来

明日原一作

「アメイの父ですか」「くくなっている」

正義感の強さからスーシーアクター（主にスーパー部隊作品）をやつていた。

名前の由来は一昨日

明日原今日子

ミライの母親で夫を亡くし、再婚している。位牌の前で泣いていた姿がミライの強い正義感を過剰にした切っ掛けでもあった。

名前の由来は今日

明日原咲治

ギミセーと再婚した青年

知的で優しい好青年たが、自分が父親として上手く出来ているのか自信が持てないでいる。

名前の由来は昨夜

ヨルル

ルルール族の妖精でプリキュアの力を秘めている。

長男という立場で、三四の中ではじかりしているか抜けた点も多

後にミライの妖精となる。

キユアネクスト

净化の乙女プリキュアに変身したミライ。

父直伝のスーザン・アクターのアクションにより大人顔負けの運動神経を発揮する。

「コルル」とスマホが融合した「コンパクト」、「コルパクター」でカードを使  
用する。

他の戦士と違い妖精と情報端末は武器にならず、徒手空拳が主体となる。

“保有カード”

変身（キュアトランス）

キュアネクストへの変身。

掛け声は「プリキュア・ネクストコネクト」  
カード使用時は「ネクストコネクト・」

呼出（コール）

妖精の国や情報端末との通話呼び出し。

結界（フィールド）

使用者が指定したものだけを残した無人世界の形成。  
ただし、いくつかの例外は無人世界に進入可能。  
その空間で物体が破壊されても現実世界の物体に影響しない。

好調（ハイテンション）

肉体を上向きに強化し、精神も強化する。

精神攻撃からの回復としても使えるがデメリットもある。  
変身時間も短縮されるため変身時間の短いキュアネクストにとっては使いにくいカード。

加速（スピード）

肉体の速度に関する部分を強化する。

回復速度も、食事の時間も強化できる。

怪力（パワー）

肉体の力に関する部分を強化する。

加速と併用することで好調と同等の効果を得る。

しかし同時使用するより好調一枚のほうが消耗が少ない。

送還（リターン）

妖精の国にあつたものを妖精の国に送還する。

本来は時間のかかる世界移動を限定的に一瞬で可能とする。

最終攻撃（フィニッシュ）

キュアネクストの必殺技。

決まった形はなく、その場の応用で発動可能。

基本はリボンの翼と盾で行う高速突撃、ネクストダイバー。

==== C == = = = = T == = = = N == = = =

ファンシーマ

妖精の国の住人で王国には最初から住んでいた。

妖精の中でも特に純粋で動物に近く、言葉を使えるものも少ない。

その純粋さゆえに周囲の環境や他者の心の影響を受けやすい。  
プリキュアの浄化能力で悪い影響を浄化することが可能。

==== C == = = = = C == = = = = N == = = = =

キュアファンシーマ

ミライの心の影響を受けたファンシーマ。

見た目は凶暴化した巨大ウサギ+リスト。

プリキュアの力の影響があるのか、最初から第一段階のファンシーガ級の力を持つていた。

特に物理攻撃耐性は圧倒的で、ディオバレルのカードの大半を使い切らせるほど。

特殊攻撃耐性は低かつたらしく、初変身したキュアネクストに浄化された。

イダテンファンシーマ

運動少年の心の影響を受けたファンシーマ。

見た目は運動靴の顔をしたマッショメン、元がどういったファン

シーならそうなるのかは永遠の謎。

目的不明で破壊活動もせずに走り続けていた謎多すぎるファン  
シーマ。

バイクより速度で劣るが柔軟な走りを活かして市街地を爆走した。  
状況的な不利は多かったものの、本来はそこまで脅威ではなかった  
りする。